

栄養士という専門職に対する職業意識の検討

－オランダと日本の学生比較および

日本における学生と現職栄養士の比較－

溝上 育代 , 花木 秀子

Study on the professional consciousness toward dietetic specialist

－ The comparison of the professional consciousness

between Japanese and Dutch students aiming at dietitian,

and between students and dietitian in present post in Japan－

Ikuyo Mizoue and Hideko Hanaki

本国は高齢化が進み、食および健康環境も複雑多様化している。その中で、QOLの確立に貢献しなければならない管理栄養士・栄養士の資質向上は必須である。そこで今回、日本学生、オランダ学生、本国の現職栄養士を対象に、資質向上を図る目的で、「栄養士職に対する職業意識」についてのアンケート調査を実施した。その結果、国別学生間には「結婚後の継続就業意識」「栄養士に必要とされる資質」「学生時の調理知識と技術の修得状況」などに有意な差異を認めた。また、両国学生共に「栄養士職に対する誇り」が「入学時の栄養士への志望意志」「理想の栄養士像」「他国栄養士活動への関心」の3項目に有意な関連性を示し、いずれも両項目肯定者割合が高かった。一方、「報酬を不当」かつ「栄養士の社会的ニーズはない」とした者の「職業に対する誇り」と「やり甲斐意識」をみると、いずれにおいても、誇りとやり甲斐意識を「ある」とする傾向を認め、特に本国の現職栄養士と学生に顕著で、職業に対する「誇り」や「やり甲斐」は「社会的ニーズ」や「報酬」のみに左右されないことが示唆された。

Key words: [栄養士] [食物栄養専攻学生] [職業意識] [国際比較] [職業適性]

(Received September 16, 2004)

I. はじめに

社会は複雑化し、食および生活は多様化している現在、高齢化現象は年々顕著になり、平均寿命は男78.32年、女85.23年¹⁾、健康寿命の平均は男71.4歳、女75.8歳²⁾とそれぞれ世界でも上位にある。その一方で、癌、心臓病、脳卒中などの非感染症が死因の大勢を占め、国の医療費は年間30兆円を超えている³⁾。そうした中で、改善策として「第六次改定日本人の栄養所要量」では栄養欠乏症と共に過剰摂取や偏りへの対応も考慮し、食事摂取基準という概念が導入され、平成12年には健康寿命の延伸を目的とした「健康日本21」が策定された。また、武見ら⁴⁾

* 鹿児島純心女子短期大学専攻科食物栄養専攻 (〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番地1号)

は、QOLの条件として健康を挙げ、その質の向上には健康状態の改善だけでなく、食行動や食環境の改善も関与しているとしている。

こうした現状を踏まえ、食生活改善や指導の充実を図る必要性は高く、専門職である管理栄養士・栄養士の資質向上および管理栄養士の指導体制整備が望まれている。

そこで、平成9年～10年にかけて、21世紀の管理栄養士等のあり方について検討がなされ、米国登録栄養士のレベル維持システムなども視野に入れた、新しい栄養士像の形成に向けて管理栄養士等の業務内容、資格制度、国家試験、養成施設におけるカリキュラム、生涯教育等の見直しが提言された。そして、平成14年4月施行として栄養士法が新たに改正されている。

しかし現実には、諸先進国と日本の医療システムの相違、医療現場における管理栄養士・栄養士を取り巻く現状、さらには、新人類といわれる本国の栄養士養成校学生の資質など多くの問題があると思われる。

そこで今回、本国およびオランダ国の学生、本国現職栄養士を対象に、栄養士就業を目指す学生の資質向上を図ることを目的として「栄養士という専門職に対する職業意識」について比較検討したので報告する。

II. 対象および方法



図1 Academisch Medisch Centrumの外観

調査対象は、本学の食物栄養専攻2年生99名とオランダ国栄養士養成施設Hoogeschool Van Amsterdam Opleidomg Voedingの22名、Haagse Hogeschool Opleiding Voeding en Dietetiekの26名、さらに、本県現職栄養士70名の総計217名である。なお、比較対照をオランダ国の学生とした理由は、国際社会を生きる将来に向けて、国際的視野を広めることを主旨として、本学で平成2年度から実施している海外研修訪問国の1国がオランダであったこと、Academisch Medisch Centrum

(図1)の見学や病院栄養士等との交流が企画されていたことなどによる。

調査方法は、栄養士という専門職に対する意識9項目、学生時の職業認識3項目、業務レベルに対する意識3項目、調理の業務と簡便化についての意識3項目、栄養士必要資質に対する認識19項目の5領域37項目についてのアンケート調査を、集合法および留置法による自己記入方式で実施した。そして、日本学生とオランダ学生、本国における学生と現職栄養士を層別に比較検討した。これらの質問紙は統計ソフト「HALWIN」データとして入力し、データのクリーニング実施後、粗集計やクロス解析を行った。クロス解析による日本学生とオランダ学生、日本学生と現職栄養士を層にした関連性についてはFisherの直接確率を用い、項目間の関連性についてはオッズ比で示し、平均値および割合は95%信頼区間を求めた。なお、オッズ比については、回答に極端な偏在がみられた項目における解析結果は、NO COUNT扱いとして検討

項目から除外した。

また、調査時期は、日本学生が平成14年10月、オランダ学生が平成15年2月と5月、本国現職栄養士が平成15年6月である。

Ⅲ. 結 果

1. 対象者の属性

対象者の属性を表1に示す。平均年齢は日本学生が19.7±1.3歳であるが、オランダ学生は高等栄養専門学校（単科大学）2～4年生を対象とし、年齢は割愛した。現職栄養士は32.2±11.3歳で、年齢構成をみると20歳代が最も多く58.6%，次いで30歳代17.1%，50歳代と40歳代がほぼ同率の1割で、60歳代は若干名である。

就業職域は病院栄養士が78.6%と最も多く、他職域は各1割以下である。

さらに、勤続年数は1～3年が42.9%と最も多く、11年以上が30.0%，6～10年が14.3%，4～5年が12.9%の順であった。

2. オランダと日本の管理栄養士・栄養士を

取り巻く環境の比較

専門職を取り巻く環境について、オランダと日本の比較を表2-1～表2-4に示す。

表2-1 国の環境

項 目	現 在 の 状 況	
	オランダ	日 本
国民数	15864千人 (2000年調査)	127291千人 (2001年調査)
高齢化	13.8% (1998年調査)	19.0% (2003年9月15日現在)
国民の死因上位疾患	1位：悪性新生物 2位：心疾患 3位：脳血管疾患 (1997年調査)	1位：悪性新生物 2位：心疾患 3位：脳血管疾患 (2000年調査)
学校給食	無	有
国民栄養の現状	国民全体：カルシウム不足、栄養過剰 子供・若年女性：鉄分不足	国民平均：カルシウム・鉄分不足、 栄養過剰
男性の賃金に対する 女性の賃金（男性=100）	77.4	66.0

(1) 国の環境

表2-1に挙げた2国の健康に関する環境を比較すると、日本の場合、人口数はオランダの8倍で、高齢化が若干高い⁵⁻⁶⁾。しかし、国民の死因上位疾患は両国ともに、悪性新生物・心疾患・脳血管疾患の順で、国民栄養の現状ではカルシウム不足、栄養過剰、鉄分不足と、同様

表1 対象者の属性

学 生	平均年齢 $\mu \pm SD$	日本学生 n=99	19.7±1.3歳
		オランダ学生 n=48	高等栄養専門学校2～4年生とし年齢は割愛した
現職栄養士	平均年齢 $\mu \pm SD$	現職栄養士 n=70	32.2±11.3歳
	年齢構成 f (%)	20歳代	41 (58.6)
		30歳代	12 (17.1)
		40歳代	7 (10.0)
		50歳代	8 (11.4)
		60歳代	2 (2.9)
	就業職域 f (%)	学校栄養士	3 (4.3)
		病院栄養士	55 (78.6)
		福祉栄養士	6 (8.6)
		産業栄養士	0 (0.0)
行政栄養士		0 (0.0)	
研究機関		2 (2.9)	
企業関係		1 (1.4)	
勤続年数 f (%)	その他	3 (4.3)	
	1～3年	30 (42.9)	
	4～5年	9 (12.9)	
	6～10年	10 (14.3)	
	11年以上	21 (30.0)	

な傾向が認められる^{7~9)}。一方、学校給食の実施状況を見ると、日本とは異なり、オランダでは国の補助による学童・生徒の食事提供は行われていない。さらに、男女の給与体系では、オランダ女性が日本女性より恵まれている現状が伺える。

(2) 栄養士の環境

次いで、表2-2に栄養士数や免許、必置規定関連を示す。オランダでは栄養士の必置規定は無く、Academisch Medisch CentrumのE. E. Oosterheetによると、栄養士数は年々減少傾向にあるという。一方、日本においては、病院、事業所、寄宿舎、福祉施設、学校などの特定給食施設、行政部門、教育部門において、設置の基準に適用する施設を必置規定場所と定めている。

表2-2 栄養士の環境

項目	現在の状況	
	オランダ	日本
栄養士必置規定	無	特定給食施設（病院、事業所、寄宿舎、福祉施設、学校）、行政、教育養成施設
栄養士数	減少傾向	増加傾向
栄養士免許及び認定制度	栄養士のみ	栄養士、管理栄養士、糖尿病療養指導士、病態栄養専門師など
国家試験	学校を規定単位取得し卒業すると合格扱い	管理栄養士養成施設：卒業と同時に受験資格取得 栄養士養成施設： 4年間の修業後、実務経験1年以上で受験資格取得 3年間の修業後、実務経験2年以上で受験資格取得 2年間の修業後、実務経験3年以上で受験資格取得
就業職域	病院、十字協会、栄養教育センター、食品会社、市場調査研究所、開業栄養士、オランダと第3国との共同研究・開発など	病院、工場、事業所、福祉施設、学校、官公署、養成施設など

免許制度では、オランダは栄養士免許のみであるが、日本には栄養士と管理栄養士の2種類があり、さらに、糖尿病療養指導士、病態栄養専門師などの学会認定制度もある。

免許取得方法としては、オランダは卒業時に難しい卒業試験を受けて栄養士免許を取得¹⁰⁾するが、日本の短期大学・専門学校では、所定の単位を修得し免許を得て、管理栄養士免許は年1回実施される国家試験に合格することで取得する。その受験資格は平成14年度4月施行の改正「栄養士法」に伴い複雑化し、学校の修業年限によって異なっている。

就業職域をみると、オランダは第3国との共同研究・開発や市場調査研究所、開業栄養士など日本に比較すると、その内容は多岐に亘る¹⁰⁾。

(3) 医療・病院現場の環境

表2-3に示す医療・病院現場の環境をみると、オランダでは、献立作成や調理業務には全く関与せず栄養指導のみで、その指導に費やす時間数を見ても日本とは異なった状況にある。一方、日本においては「長靴をはいた兎ちゃん」と形容されるように、栄養士の業務内容が献立作成や調理と深く関与しており、殆ど調理業務のみの栄養士も存在する。そのため、E. E. Oosterheetによると、オランダの栄養士による残飯調査の実施はなく、適温食の提供も1日1食であるという。

また、就業職域をみると、オランダには主治医制度があり、手術・入院などの場合は国・公立病院に移送するため、殆どが公的病院に所属しているが、本国栄養士の就業先は国・公立病院、個人病院と多岐にわたっている。入院時の食事療養費は、オランダでは入院費の中に含まれるが、日本では平成6年度の健康保険法の一部改正に伴い、入院費に含めず自己負担となった。さらに、日本には特別食・特別管理・食堂・選択メニュー加算の食事加算制度があるが、オランダには無い。

次いで、職業別の報酬をみると、オランダの栄養士は看護師より高額で、作業療法士や理学療法士と同額程度である。しかし、日本の場合は看護師、作業療法士、理学療法士より低額である。

表2-3 医療・病院現場の環境

項目	現在の状況	
	オランダ	日本
献立作成	調理師	栄養士
栄養士の調理業務関与	調理業務行わない	調理業務行う
調理現場の責任者	調理責任者	栄養士あるいは調理師
栄養士の主な仕事	栄養指導	献立作成・栄養指導
栄養指導について	外来患者：60分 入院患者：40分 (2回目以降は15分程度)	外来患者：概ね15分以上で保険点数付 入院患者：概ね15分以上で保険点数付 集団指導：1回15人以下、40分以上で保険点数付
サイクル食の有無	有	有
残飯調査	実施していない	実施している施設が多数
選択メニューの実施	毎食2～3種から選択する	毎日または予め定められた日に、1日2食以上の食事の主菜等について患者が選択できる複数のメニューによる食事を提供することで保険点数付
献立の種類	一般食、幼児食 エネルギーコントロール食 コレステロールコントロール食	常食、糖尿病食、腎臓病食、高血圧・心臓病食 肝臓病食、膵臓病食、高脂血症食、流動食、 離乳食、幼児食など
適温食	温かい食事は1日に1食	3食温かい食事
食事療養費の支払い	入院費に含まれている	退院時に個人で支払う
食事加算制度	無	特別食・特別管理・食堂・選択メニュー加算など
報酬	看護師よりも高額であり、作業療法士や理学療法士と同額程度	看護師、作業療法士、理学療法士より低額
食事形態	ベッドのみで食事	ベッドや食堂利用
中心静脈栄養の実施者	注射実施：医師	注射実施：医師
病院の経営形態	ほぼ国営	国営、民営

※ オランダの病院現場は、主にAcademisch Medisch Centrumの場合である。

※ 日本の栄養指導は、管理栄養士が行うことにより保険点数が付く。

(4) 教育の環境

表2-4に示す学校教育の環境をみると、進学率は日本が70.5%と顕著に高く、指定栄養士養成施設も333校あるが、オランダはわずかに4校である。栄養士養成校の修業年限は、日本では2～4年間と選択肢が複数であるのに対し、オランダは4年間のみである。また、学外実習期間としては、日本は平成14年4月施行の新「栄養士法」以降、栄養士養成施設は「給食の運営」1単位で校外実習1週間となり、管理栄養士養成施設は「臨床栄養学」2単位、「公衆栄養学」1単位、「給食経営管理論」1単位の臨地・校外実習4週間となった。一方、オランダ高等栄養専門学校は26週間と長期間である。

表2-4 教育の環境

教育の環境	項目	現在の状況	
		オランダ	日本
	義務教育	16歳まで 但し、留年有	15歳まで (中学卒業まで)
進学率	大学・高等専門学校へ3割	高等教育機関へ70.5%	
栄養士養成校数	4校	指定養成施設333校 (平成14年4月現在)	
栄養士養成校修業年限	4年	2年～4年	
実習期間	病院、給食管理・教育機関でそれぞれ13週間	栄養士養成施設は1週間 管理栄養士養成施設は4週間	

3. オランダと日本の学生比較および日本における学生と現職栄養士の比較

(1) 「栄養士という専門職に対する意識」項目との関連性

「栄養士という専門職に対する意識」領域9項目について、日本学生とオランダ学生、日本学生と現職栄養士を層別にみた結果を表3に示す。

表3 「栄養士という専門職に対する意識」項目との関連

(%)

領域・項目	カテゴリ	日本学生 n=99	オランダ学生 n=48	現職栄養士 n=70	p値	
					日本・オランダ	学生・現職
栄養士という専門職に対する意識						
栄養士の社会的ニーズに対する意識	ある	22 (22.2)	30 (62.5)	10 (14.3)	★★★★	
	ない	77 (77.8)	18 (37.5)	60 (85.7)		
職業に対するやり甲斐意識	ある	96 (97.0)	39 (81.3)	68 (97.1)	★★	
	ない	3 (3.0)	9 (18.8)	2 (2.9)		
職業に対する適性意識	ある	44 (44.4)	38 (79.2)	42 (60.0)	★★★★	
	ない	55 (55.6)	10 (20.8)	28 (40.0)		
報酬の妥当性	妥当	23 (23.2)	13 (27.1)	9 (12.9)		
	不当	76 (76.8)	35 (72.9)	61 (87.1)		
勤務時間の妥当性	適度	21 (21.2)	32 (66.7)	12 (17.1)	★★★★	
	長い	78 (78.8)	16 (33.3)	58 (82.9)		
職業に対する誇り	ある	74 (74.7)	37 (77.1)	58 (82.9)		
	ない	25 (25.3)	11 (22.9)	12 (17.1)		
理想の栄養士像	ある	80 (80.8)	26 (54.2)	46 (65.7)	★★★★	★
	ない	19 (19.2)	22 (45.8)	24 (34.3)		
他国栄養士活動への関心	ある	79 (79.8)	37 (77.1)	62 (88.6)		
	ない	20 (20.2)	11 (22.9)	8 (11.4)		
結婚後の継続就業意識	ある	66 (66.7)	48 (100.0)		★★★★	NO SANCTION
	ない	33 (33.3)	0 (0.0)			
結婚後の就業状況	結婚している			15 (21.4)	★★★★	NO SANCTION
	結婚していない			55 (78.6)		

★p<0.05★★p<0.01★★★★p<0.001

日本学生とオランダ学生を比較すると、「栄養士の社会的ニーズに対する意識」にはp<0.001で有意な差異を認め、日本学生は「ない」とした者が77.8%と高く、オランダ学生は「ある」とした者が62.5%と高い。「職業に対するやり甲斐意識」ではp<0.01で有意差を認め、両学生共に「ある」が高く、各97.0%・81.3%を示した。「職業に対する適性意識」においてもp<0.001で有意差を認め、日本学生は「ない」とした者が55.6%と高く、オランダ学生は「ある」とした者が79.2%と高い。「報酬の妥当性」には国別学生間に関連性はみられない。「勤務時間の妥当性」にはp<0.001で有意な差異を認め、日本学生は「長い」と認識している者が78.8%と高く、オランダ学生は「適度」と認識している者が66.7%と高い。「理想の栄養士像」にはp<0.001で有意な差異を認め、両国学生共に「ある」とした者が多いが、オランダ学生より日本学生が

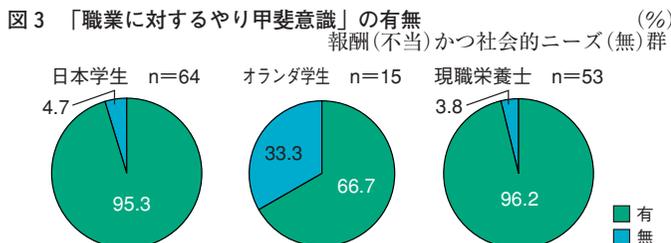
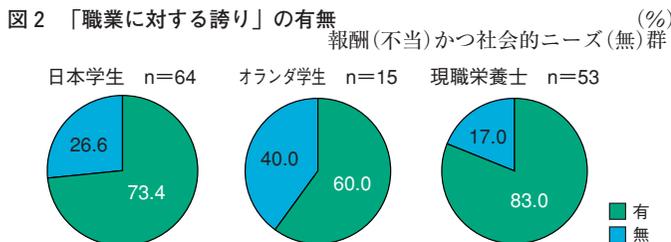
26.6%高い。「結婚後の継続就業意識」をみると $p < 0.001$ で有意差を認め、両国学生共「ある」が多く、比較するとオランダ学生が33.3%高い。一方、本国における栄養士養成校学生と現職栄養士との間に有意差を認めた項目は、「理想の栄養士像」のみで、「ある」者が、各80.8・65.7%である。「結婚後の就業」については、学生への設問を「就業希望」とし、現職栄養士には「現在の就業状況」としたため、比較検討を割愛する。なお、本対象の「結婚後の就業状況」については、20歳代が半数を占め、就業年数1～3年が42.9%であったことから未婚者が78.6%と高い。

さらに、「報酬の妥当性」と有意な関連性を示した「栄養士の社会的ニーズに対する意識」のオッズ比とその両項目肯定・否定者の回答状況を表4に挙げる。「栄養士の社会的ニーズに対する意識」は日本学生にのみオッズ比4.1で有意な関連性を示し、否定者回答割合が64.6%と有意に高い。

なお、「報酬の妥当性」が影響を及ぼす項目として「やり甲斐意識」「NST (Nutrition Support Team)の一員としてのレベルに対する意識」「勤務時間」についても検討したが、関連性が認められなかったので割愛する。

表4 「報酬の妥当性」が及ぼす影響

項目	群別	オッズ比 (95%CL)	両項目肯定者		両項目否定者	
			f	% (95%CL)	f	% (95%CL)
栄養士の社会的ニーズに対する意識	日本学生	4.1 (1.3, 13.0)	10	10.1 (4.2, 16.0)	64	64.6 (55.2, 74.1)
	オランダ学生	2.5 (0.5, 14.0)	10	20.8 (9.3, 32.3)	15	31.3 (18.1, 44.4)
	現職栄養士	1.9 (0.2, 13.2)	2	NOCOUNT	53	75.7 (65.7, 85.8)



続いて、「報酬が不当」かつ「栄養士に対する社会的ニーズがない」とした者の「職業に対する誇り」と「職業に対するやり甲斐意識」を図2・3に示す。日本学生・オランダ学生・現職栄養士共に「職業に対する誇り」を有する者が多く、各73.4%・60.0%・83.0%である。「職業に対するやり甲斐意識」も同様に「ある」が多く、各95.3%・66.7%・96.2%である。

表5に「職業に対する誇り」と有意な関連性を示した項目のオッズ比とその両項目肯定・否定者の回答状況を挙げる。なお、「職業に対する誇り」が影響を及ぼす項目として「栄養士の社会的ニーズに対する意識」「職業に対する適性意識」「報酬の妥当性」「勤務時間の妥当性」「NST一員としてのレベルに対する意識」「就業時の希望職域」「対象別栄養指導の難易度に対する意識」も検討したが、関連性が認められなかったので割愛する。

表5 「職業に対する誇り」が及ぼす影響

項目	群別	オッズ比 (95%CL)	両項目肯定者		両項目否定者	
			f	% (95%CL)	f	% (95%CL)
入学時の栄養士への志望意志	日本学生	7.3 (2.4, 23.1)	63	63.6 (54.2, 73.1)	14	14.1 (7.3, 21.0)
	オランダ学生	5.4 (1.1, 29.8)	28	58.3 (44.4, 72.3)	7	14.6 (4.6, 24.6)
	現職栄養士	1.1 (0.2, 4.8)	20	28.6 (18.0, 39.2)	8	11.4 (4.0, 18.9)
職業に対するやり甲斐意識	日本学生	NO COUNT	73	73.7 (65.1, 82.4)	2	NO COUNT
	オランダ学生	6.9 (1.1, 45.4)	33	68.8 (55.6, 81.9)	5	10.4 (1.8, 19.1)
	現職栄養士	NO COUNT	57	81.4 (72.3, 90.5)	1	NO COUNT
理想の栄養士像	日本学生	4.8 (1.5, 15.9)	65	65.7 (56.3, 75.0)	10	10.1 (4.2, 16.0)
	オランダ学生	8.3 (1.3, 66.0)	24	50.0 (35.9, 64.1)	9	18.8 (7.7, 29.8)
	現職栄養士	1.5(0.3, 6.1)	39	55.7 (44.1, 67.4)	5	7.1 (1.1, 13.2)
他国栄養士活動への関心	日本学生	3.2 (1.0, 10.3)	63	63.6 (54.2, 73.1)	9	9.1 (3.4, 14.8)
	オランダ学生	7.7 (1.4, 47.4)	32	66.7 (53.3, 80.0)	6	12.5 (3.1, 21.9)
	現職栄養士	0.7 (0.0, 6.5)	51	72.9 (62.4, 83.3)	1	NO COUNT
結婚後の継続就業意識	日本学生	6.0 (2.0, 18.0)	57	57.6 (47.8, 67.3)	16	16.2 (8.9, 23.4)
	オランダ学生	NO COUNT	37	77.1 (65.2, 89.0)	0	NO COUNT
結婚後の就業状況	現職栄養士	NO COUNT	14	20.0 (10.6, 29.4)	11	15.7 (7.2, 24.2)

「職業に対する誇り」が影響を及ぼす要因としては「入学時の栄養士への志望意志」に日本学生がオッズ比7.3, オランダ学生が5.4と有意な関連性を示し, 両国学生共に両項目肯定者割合が63.6%・58.3%と有意に高い。「職業に対するやり甲斐意識」はオランダ学生にのみオッズ比6.9で有意な関連性を認め, 両項目肯定者が68.8%と有意に高い。「理想の栄養士像」は日本学生がオッズ比4.8, オランダ学生が8.3と有意な関連性を示し, いずれも両項目肯定者が65.7%・50.0%と有意に高い。「他国栄養士活動への関心」では日本学生がオッズ比3.2, オランダ学生が7.7と有意な関連性を示し, 両国学生共に両項目肯定者が63.6%・66.7%と有意に高い。「結婚後の継続就業意識」には日本学生にのみオッズ比6.0と有意な関連性がみられ, 両項目肯定者が57.6%と有意に高い。

表6 国別学生の考える必要資質

日本学生 n=65			オランダ学生 n=24		
項目	f	%	項目	f	%
責任感	29	44.6	社会性	17	70.8
思いやり	25	38.5	指導力	16	66.7
臨機応変さ	24	36.9	責任感	7	29.2

「職業に対する誇りがあり」かつ「理想の栄養士像がある」とする者が, 栄養士に必要と考える上位3項目の資質を表6に示す。

日本学生においては「責任感」が最も多く44.6%で, 次いで「思いやり」が38.5%, 「臨機応変さ」が36.9%である。オランダ学生は1位に「社交性」を70.8%の者が挙げ, 次いで「指導力」66.7%, 「責任感」29.2%の順である。

(2) 「学生時の職業認識」項目との関連性

表7に示す「学生時の職業認識」領域3項目をみると, 国別学生間においては「入学時の栄養士への志望意志」に有意な関連性はみられないが, 「入学前の業務内容に対する知識」には有意水準0.001で差異を認め, 日本学生には「なかった」が88.9%と高く, オランダ学生は

「あった」とした者が62.5%と高い。「入学前・後の業務内容に対する認識の相違」では有意水準0.001で差異を認め、いずれも「あった」とした者が多く、オランダ学生より日本学生が30.6%高い。一方、本国における学生と現職栄養士間をみると、「入学時の栄養士への志望意志」では有意水準0.001で差異を示し、学生は「強かった」者が74.7%と高く、現職栄養士は「弱かった」者が65.7%と高い。

しかし、「入学前の業務内容に対する知識」および「入学前・後の業務内容に対する認識の相違」には有意な関連性はみられない。

表7 「学生時の職業認識」項目との関連 (%)

領域・項目	カテゴリ	日本学生 n=99	オランダ学生 n=48	現職栄養士 n=70	p値	
					日本・オランダ	学生・現職
学生時の職業認識						
入学時の栄養士への志望意志	強かった	74 (74.7)	32 (66.7)	24 (34.3)		★★★
	弱かった	25 (25.3)	16 (33.3)	46 (65.7)		
入学前の業務内容に対する知識	あった	11 (11.1)	30 (62.5)	7 (10.0)	★★★	
	なかった	88 (88.9)	18 (37.5)	63 (90.0)		
入学前・後の業務内容に対する認識の相違	あった	88 (88.9)	28 (58.3)	56 (80.0)	★★★	
	なかった	11 (11.1)	20 (41.7)	14 (20.0)		

★★★p<0.001

表8に「入学時の栄養士への志望意志」と有意な関連性を認めた項目のオッズ比とその両項目肯定・否定者の回答状況を示す。

なお、「入学時の栄養士への志望意志」が影響を及ぼす項目として、「入学前の業務内容に対する知識」「入学前・後の業務内容に対する認識の相違」「栄養士の社会的ニーズに対する意識」「職業に対する適性意識」「就業時の希望職域」「職業に対する誇り」も検討したが、関連性が認められなかったので割愛する。

表8 「入学時の栄養士への志望意志」が及ぼす影響

項目	群別	オッズ比 (95%CL)	両項目肯定者		両項目否定者	
			f	% (95%CL)	f	% (95%CL)
職業に対するやり甲斐意識	日本学生	NO COUNT	73	73.7 (65.1, 82.4)	2	NO COUNT
	オランダ学生	5.8 (1.0, 37.2)	29	60.4 (46.6, 74.3)	6	12.5 (3.1, 21.9)
	現職栄養士	NO COUNT	23	32.9 (21.9, 43.9)	1	NO COUNT
理想の栄養士像	日本学生	2.7 (0.8, 8.8)	63	63.6 (54.2, 73.1)	8	8.1 (2.7, 13.4)
	オランダ学生	2.8 (0.7, 11.6)	20	41.7 (27.7, 55.6)	10	20.8 (9.3, 32.3)
	現職栄養士	5.9 (1.4, 28.9)	21	30.0 (19.3, 40.7)	21	30.0 (19.3, 40.7)

「入学時の栄養士への志望意志」が影響を及ぼす要因としては、「職業に対するやり甲斐意識」にオランダ学生のみがオッズ比5.8で有意な関連性を示し、両項目肯定者割合が60.4%と有意に高い。

表9 栄養士必要資質
志望意志(強)・理想栄養士像(有)群

現職栄養士 n=21		
項目	f	%
向上心	9	42.9
思いやり	9	42.9
臨機応変さ	8	38.1

一方、「理想の栄養士像」には現職栄養士のみがオッズ比5.9で有意な関連性を示し、両項目肯定者・否定者割合が同率であり、有意差は認められない。

現職栄養士がオッズ比で有意な関連性を示した「入学時の栄養士への志望意志」と「理想の栄養士像」の両項目肯定者が、栄養士に必要なとする上位3項目の資

質を表9に挙げる。1位は「向上心」と「思いやり」で、同率の42.9%を占め、2位は「臨機応変さ」の38.1%である。

(3) 「業務レベルに対する意識」項目との関連性

日本学生とオランダ学生および日本学生と現職栄養士の「業務レベルに対する意識」領域3項目の関連性を表10に示す。「就業時の希望職域」には、国別学生間に有意水準0.001で差異を表10「業務レベルに対する意識」項目との関連

領域・項目	カテゴリ	日本学生 n=99	オランダ学生 n=48	現職栄養士 n=70	p値	
					日本・オランダ	学生・現職
業務レベルに対する意識						
就業時の希望職域	医療関連	29 (29.3)	30 (62.5)		★★★	NO SANCTION
	その他	70 (70.7)	18 (37.5)			
就業職域	医療関連			55 (78.6)		
	その他			15 (21.4)		
NST一員としてのレベルに対する意識	同等	34 (34.3)	21 (43.8)	17 (24.3)		
	低い	65 (65.7)	27 (56.3)	53 (75.7)		
対象別栄養指導の難易度に対する意識	傷病者対象が高い	88 (88.9)	37 (77.1)	62 (88.6)		
	差はない	11 (11.1)	11 (22.9)	8 (11.4)		

★★★p<0.001

認め、日本学生は医療関連以外の職域である学校・保健所・保育所・事業所・福祉施設などの「その他」が高く70.7%を示し、オランダ学生は「医療関連」が62.5%と高い。「NSTの一員としてのレベルに対する意識」には有意な関連性は認められないが、両国の半数以上の学生が「低い」と認識している。「対象別栄養指導の難易度に対する意識」にも有意な関連性は認められないが、両国学生共に「傷病者対象が高い」と認識する傾向が高く、各7～8割である。一方、本国における学生と現職栄養士間には、いずれの項目においても有意な関連性はみられない。

なお、「就業時の希望職域」については学生への設問を「希望職域」とし、現職栄養士への設問を「現在の就業職域」としたため比較検討できなかった。

(4) 「調理の業務と簡便化についての意識」項目との関連性

「調理の業務と簡便化についての意識」領域3項目について、日本学生とオランダ学生、日本学生と現職栄養士を層別にみた結果を表11に示す。

表11 「調理の業務と簡便化についての意識」項目との関連

領域・項目	カテゴリ	日本学生 n=99	オランダ学生 n=48	現職栄養士 n=70	p値	
					日本・オランダ	学生・現職
調理の業務と簡便化についての意識						
調理の知識と技術の必要性	必要	98 (99.0)	45 (93.8)	70 (100.0)		
	不必要	1 (1.0)	3 (6.3)	0 (0.0)		
学生時の調理知識と技術の修得状況	している	7 (7.1)	40 (83.3)	12 (17.1)	★★★	★
	していない	92 (92.9)	8 (16.7)	58 (82.9)		
調理業務の簡便化意識	手作り中心	84 (84.8)	33 (68.8)	56 (82.4)	★	
	加工食品活用	15 (15.2)	15 (31.3)	12 (17.6)		

★p<0.05★★★p<0.001

国別学生間の関連性をみると、「調理の知識と技術の必要性」は両国学生共に9～10割が「必要」と認識しており、有意な関連性はみられない。「学生時の調理知識と技術の修得状況」にはp<0.001で差異を認め、日本学生は「修得していない」とする者が92.9%と高く、オランダ

学生は「修得している」とする者が83.3%と高い。栄養士業務に就いた場合の「調理業務の簡便化意識」では $p < 0.05$ で差異を認め、両国学生共に「手作り中心」が高く各84.8%・68.8%を占めている。

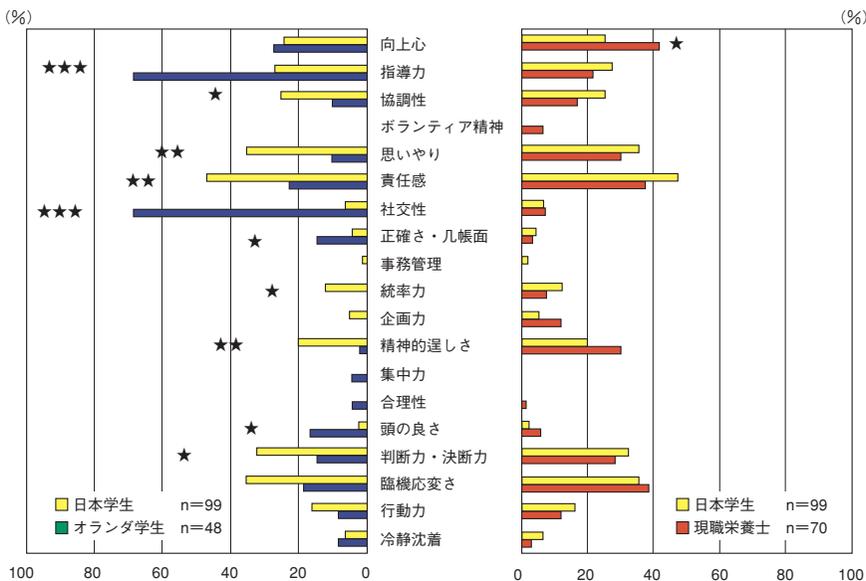
一方、本国の学生と現職栄養士間の関連性をみると、「調理の知識と技術の必要性」には有意差を認めないが、「必要」と回答した現職栄養士は100.0%である。「学生時の調理知識と技術の修得状況」は $p < 0.05$ で差異を認め、日本学生および現職栄養士共に「修得していない」とする者が高く、各92.9%・82.9%である。続いて「調理業務の簡便化意識」には有意な差異はみられないが、学生・現職栄養士共に「手作り中心」がほぼ同率の8割を占めている。なお、現職栄養士2名が無回答であったため当該項目回答者は68名である。

(5) 「栄養士必要資質に対する認識」項目との関連性

国別学生間および本国における学生と現職栄養士間の「栄養士必要資質に対する認識」項目との関連性を図4に示す。国別学生間では「指導力」(27.3%・68.8%)と「社交性」(6.1%・68.8%)に $p < 0.001$ で差異を認め、次いで、「思いやり」(35.4%・10.4%)、「責任感」(47.5%・22.9%)、「精神的逞しさ」(20.2%・2.1%)に $p < 0.01$ 、「協調性」(25.3%・10.4%)、「正確さ・几帳面」(4.0%・14.6%)、「統率力」(12.1%・0.0%)、「頭の良さ」(2.0%・16.7%)、「判断力・決断力」(32.3%・14.6%)に $p < 0.05$ で有意な差異がみられる。

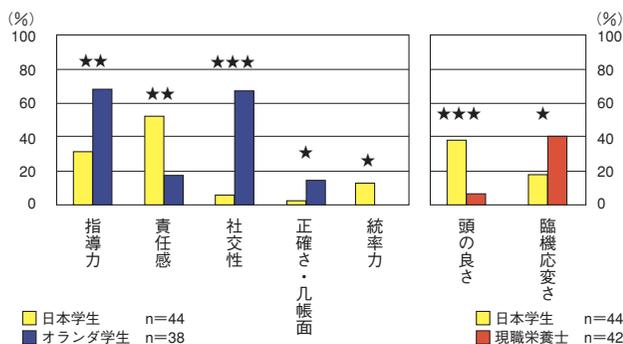
一方、本国における学生と現職栄養士間には「向上心」(24.2%・41.4%)の1項目にのみ $p < 0.05$ で有意な関連性が認められる。

図4 「栄養士必要資質に対する認識」項目との関連



続いて、「栄養士という職業に適性がある」とした者のみを対象にし、国別学生間および本国における学生と現職栄養士間に有意な差異が認められた「栄養士必要資質」項目を図5に挙げる。国別学生間では「社交性」(6.8%・68.4%)に $p < 0.001$ で、「指導力」(31.8%・68.4%)

図5 栄養士適正(有)群の有意差を認めた栄養士必要資質



と「責任感」(52.3%・18.4%)に $p < 0.01$ で、「正確さ・几帳面」(2.3%・15.8%)と「統率力」(13.6%・0.0%)に $p < 0.05$ で有意な差異がみられる。一方、本国における学生と現職栄養士間では「頭の良さ」(38.6%・7.1%)に $p < 0.001$ 、「臨機応変さ」(18.2%・40.5%)に $p < 0.05$ で有意差がみられる。

Ⅳ. 考 察

1. 「栄養士という専門職に対する意識」項目との関連性

「栄養士という専門職に対する意識」には国別学生間において有意差が多く認められた。その中で「結婚後の継続就業意識」をみると、「生涯、就業する希望がある」とした者は、日本学生が7割弱で、オランダ学生は全てであった。これは、オランダにおける栄養士養成校数が4校という少なさからくる栄養士に対する需要の高さや、女性の給与体系および栄養士の報酬が本国栄養士に比較して恵まれていること、自宅を事務所にして業務を行うことのできる「開業栄養士」制度があることなどによると推測される。オランダの開業栄養士は、地域住民が抱える栄養問題の改善を専門に扱っており、自宅に事務所を構えることで、妊娠・出産・育児・介護などによる就業中断を回避できるという利点がある。今後、本国においてもオランダの「開業栄養士」制度が導入されることは、日本学生の継続就業意識を増大する可能性を示唆しており、栄養士という名称の認知度を高め職域拡大に繋がると考える。さらに、「3分間医療」と問題視される多忙な日本の医療体制をフォローして、地域住民の生活習慣病一次予防に貢献し、延いては医療費超過現象の改善にも影響を及ぼすと考える。

「報酬の妥当性」を不当とした者は日本学生・オランダ学生に75%前後あり、現職栄養士は87.1%と高く、国別学生間および本国の学生・現職栄養士間に有意差はみられなかった。しかし、日本学生のみが「報酬の妥当性」と「社会的ニーズに対する意識」の間にオッズ比で有意な関連性を示し、両項目否定者割合が有意に高かった。これは、就職活動を通して報酬が職業ランクの指標である¹¹⁾ことや、NSTスタッフの中で最も低額給与であることを認識したためと、本県健康増進課が提示するデータで市町村の管理栄養士必置率が31.6%と低い現状を知り得たことによると推測される。また、日本学生は栄養士の社会的ニーズを低いとし、報酬は不当で勤務は長時間であるとする一方で、職業に対するやり甲斐意識は高く、理想の栄養士像を持っている。しかし、栄養士の社会的ニーズが高く、報酬も日本に比較して恵まれ、かつ勤務時間も妥当であるとするオランダ栄養士数は減少傾向にあるという。これは、国の制度を動かす女性議員数1つをみても、オランダや他先進諸国は本国よりも多く¹²⁾、女性が男性と同等に、誇りとやり甲斐意識を持てる魅力ある職業が、栄養士以外にも多種多様にあるためと推測される。

そこで、「報酬は不当」かつ「栄養士の社会的ニーズはない」とした者の「職業に対する誇り」と「やり甲斐意識」をみると、日本学生・オランダ学生・現職栄養士共に、誇りも、やり甲斐意識も「ある」とする傾向を認め、特に、本国の現職栄養士と学生に顕著であった。これらから、職業に対する「誇り」や「やり甲斐」は「社会的ニーズ」や「報酬」より、職務の必要性に対する固い信念であることを示唆した。しかし、栄養士の資質向上と同時に、社会評価の基準となる報酬を含めた待遇改善などの改革も行わなければ、個人の信念だけに依存した資格に発展性はないと考える。

次いで、「職業に対する誇り」が及ぼす影響項目として、両国学生共にオッズ比で有意な関連性を示した項目は「入学時の栄養士への志望意志」「理想の栄養士像」「他国の栄養士活動への関心」であった。それぞれの両項目肯定・否定者割合をみると、いずれも両項目肯定者割合が有意に高く、「栄養士という職業に誇り」を持つ者は入学時の栄養士への志望意志が強く、理想の栄養士像を持ち、他国栄養士活動への関心も高い様子が伺えた。このことから、「職業に対する誇り」は国民性を超えた意識であることが示唆された。また、オランダ学生においてのみ職業に対する「誇り」が「やり甲斐」に影響を及ぼす傾向を認めた。これは、合理的性格を有するとされるオランダの国民性も一因と推察される。さらに、「職業に対する誇りがあり」かつ「理想の栄養士像を持っている」者が、栄養士の必要資質として上位に挙げた項目をみると、日本学生は「責任感」「思いやり」「臨機応変さ」を、オランダ学生は「社交性」「指導力」「責任感」を挙げていた。本国では、平成14年の改正栄養士法施行から管理栄養士・栄養士業務の基本理念を「食品・調理」のモノから「人」へと方向転換しているが、栄養士の必要資質として日本学生が挙げている「思いやり」や、オランダ学生が挙げる「社交性」は、「人」を対象にする場合には必須の条件と思われる。しかし、近年の本国若者はコミュニケーションのとり方が不得手といわれており、検討改善すべき点であると考えられる。

2. 「学生時の職業認識」項目との関連性

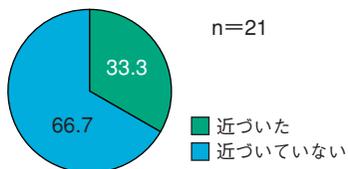
「学生時の職業認識」領域において、国別学生間では「入学前の業務内容に対する知識」「入学前・後の業務内容に対する認識の相違」の2項目に有意差がみられ、「入学前の業務内容に対する知識」は、日本学生よりオランダ学生が51.4%高かった。1988年、オランダでは公的機関の栄養教育センターが、授業の中に栄養教育を組み込む必要性を提起しており¹⁰⁾、15年経過した現在では、そのシステムが充実してきていると予測される。本対象であるオランダ学生の義務教育期は、学校現場への「栄養教育」の導入を提起した時期にあたっている。従って、栄養士養成校入学以前から、栄養知識と同時に栄養士の仕事内容の知識も若干あったと推察される。一方、日本には学校給食の制度があり、自校式の学校では栄養士に接する機会もあったと思われるが、栄養教育の頻度は少なく、「給食のおばちゃん」という認識であったと推測される。しかし近年、授業の中に「総合学習」の時間が導入¹³⁾されて多種多様な職業人に出会う機会が増えており、さらに、近い将来「栄養教諭」が制度化¹⁴⁾する予定でもあることから、状況は望ましい方向に変化すると期待される。

また、本国における学生と現職栄養士間では「入学時の栄養士への志望意志」にのみ有意な差異を認め、学生が志望意志は高かった。この背景には、近年の不況を乗り越え、就職難に対

応するためのライセンス取得希望があると考える。

次いで、「入学時の栄養士への志望意志」が及ぼす影響要因としては、「職業に対するやり甲斐意識」にオランダ学生のみがオッズ比で有意な関連性を示した。これは、本国学生の多くが「取り敢えず大学へ」と進学する現状とは異なり、低い進学率の中において目的意識を持って選択した学校であることや、本調査対象の修業年限がオランダでは4年間、本国では2年間であったことなどがあると推測される。

図6 理想への接近度 (％)
志望意志(強)・理想栄養士像(有)群



「理想の栄養士像」には現職栄養士が関連性を示し、強い入学意志を持ち、理想像を持つことが栄養士就業に繋がることを示唆した。また、現職栄養士は栄養士適性資質として「向上心」「思いやり」「臨機応変さ」を挙げているが、図6をみると、自らの描く理想像には66.7%が「近づいていない」現状が伺えた。これらは、改正栄養士法のもと、

新しい栄養士像の形成に向けて、管理栄養士等の業務内容が確立し、医療現場における管理栄養士・栄養士を取り巻く環境改善などが行われることに伴い、自己啓発することで理想像に近づけると思われる。

3. 「業務レベルに対する意識」項目との関連性

「業務レベルに対する意識」領域においては、国別学生間の「就業時の希望職域」のみに有意差を認め、オランダ学生は医療関連希望が6割を超え、日本学生は学校・保育所・事業所などの希望が7割を超えていた。これは、オランダ栄養士の職域は医療色が強く、学外実習も病院実習が中心であるためと、本対象の日本学生が短期大学生であったためと推測される。また、本学において、専門科目の中で国・県・市版の「健康日本21」について学び、さらに、6人に1人と公表された¹⁵⁾糖尿病患者数を減少させる必要性を教育されたことも影響していると思われる。なお、有意差は認められなかったが、本国学生および現職栄養士は、栄養士職を看護師などに比べてレベルが低いと認識している様子が伺えた。本現職栄養士の8割弱は「病院栄養士」であることから、医療現場における管理栄養士・栄養士を取り巻く環境改善と栄養士自身の資質レベルアップが望まれる。

4. 「調理の業務と簡便化についての意識」項目との関連性

「調理の業務と簡便化についての意識」領域において、国別学生間では「学生時の調理知識と技術の修得状況」「調理業務の簡便化意識」の2項目に有意差を認めた。日本学生は学生時に調理知識と技術の修得が顕著に低かったが、オランダ学生の8割強は「修得している」と回答していた。これは、栄養指導や栄養教育を栄養士の主業務とするオランダと、業務内容に調理関連が組み込まれている日本の「調理レベル」に対する捉え方に軽重があるためと、本国における若年層の調理技術低下¹⁶⁾現象が背景にあると推測される。しかし、日本学生・オランダ学生・現職栄養士共に高率で、調理の知識や技術は必要であると認識していた。近年、日本においては食事の委託化が進み、フードサービスを委託側が担当し、施設側がクリニカルサービ

スを行う分業傾向がみられる。こうした中で、養成校においては、調理学実習時間が2コマから1.5コマに短縮され、学外実習期間は管理栄養士養成校で4週間、栄養士養成校で1週間となった。これは諸先進国に比較して顕著に短期間である。家庭における食教育が衰退し、調理技術にも低下現象がみられ、さらには調理済み簡便化食品が氾濫している現代、養成校を卒業した後に給食管理上や栄養指導・教育を行う際、柔軟な献立構成および治療食への展開が出来るかが懸念される。これらの解決策として、どこで・だれが教育していくのかは今後の大きな課題であると思われる。

5. 「栄養士必要資質に対する認識」項目との関連性

「栄養士必要資質に対する認識」領域において、国別学生間では10資質に有意な差異が認められた。日本学生は必要資質として「責任感」を1番に挙げ、花木¹⁷⁾の報告と同様な結果が得られた。10年経過した現在においても、学生が栄養士に必要なと認識する資質には変化を認めなかった。また、「思いやり」「精神的逞しさ」「協調性」は「長靴をはいた兎ちゃん」から脱するには必要な資質であり、「統率力」「判断力・決断力」は調理現場の管理に必要な資質であると思われる。一方、オランダ学生は人を対象にした場合に必要な「指導力」「社交性」を高率で挙げていた。いずれの資質も栄養士だけでなく社会人として具備すべき資質と考えるが、本国学生には低率であった「社交性」は、今後「モノ」から「人」へと方向転換するには重要な資質であり、認識の是正が必要と思われる。

さらに、栄養士になるには適性があるとした者のうち、国別学生間に差異を認め、日本学生が有意に高かった資質は「責任感」「統率力」で、組織の管理能力を必要と認識する傾向が高かった。一方、本国の学生と現職栄養士間では「頭のよさ」「臨機応変さ」の2資質に有意差があった。学生は栄養士としての知的能力を必要と認識し、現職栄養士は物事に対処する知恵と柔軟さを併せ持った即応力を必要と考えている傾向が伺えた。

V. おわりに

本国・オランダ間では「栄養士という専門職」を取り巻く環境が異なり、立場を同じにする学生同士の間にも専門職に対する意識に有意差が多く認められた。2004年にはシカゴで“Sharing Global Perspectives・Building Our Common Ground”を統一テーマとして第14回国際栄養士会議が開催され、2008年は本国が開催国の予定である。また、2002年にクアラルンプールで行われたアジア栄養士会議には本国栄養士の出会者が最も多かったと聞く。こうした会議が回を重ねることで、将来、栄養士という専門職が国際的に標準化されるという意見がある。そうした中で、本国栄養士会は平成16年度より管理栄養士・栄養士の資質向上を目的とした継続的な学習の場として、新生涯学習制度をスタートさせようとしている。栄養士就業を目指す日本学生は、本制度を積極的に活用し、栄養士が国際的に通用する専門職となるまでには、意識・実力共に諸外国栄養士に遜色のない自らを育成しておかなければならないと考える。

なお、今回対象とした日本学生・オランダ学生・現職栄養士は、偏在する地域の対象であるため、今後さらに、地域を拡大し調査を継続していく予定である。

本研究を終えるにあたり、アンケートに御協力頂いた同短期大学および本県現職栄養士の方々、オランダ国 Hoogeschool Van Amsterdam Opleedomg Voeding, Haagse Hogeschool Opleiding Voeding en Dietetiek の関係者各位に深く謝意を申し上げます。

<参考文献>

- 1) 厚生労働省大臣官房統計情報部：日本人の平均余命 平成14年簡易生命表
- 2) 世界保健機構：2002年世界保健報告
- 3) 厚生労働省保険局調査課：平成14年 医療費の動向
<http://www.mhlw.go.jp/topics/medias/year/02/1.html>
- 4) 保健所管理栄養士業務研究会：
21世紀における保健所管理栄養士の健康づくり戦略に関する報告書，2，2003
- 5) 財団法人 矢野恒太記念会：世界国勢図絵2002／03年版，15，71，2002
- 6) 総務省統計局：高齢者人口の現状と将来
<http://www.stat.go.jp/data/topics/topics051.htm>
- 7) 総務省統計局：世界の統計2003年版，325
- 8) 厚生労働省大臣官房統計情報部：平成14年人口動態統計の概況
- 9) 健康・栄養情報研究会：国民栄養の現状 平成13年国民栄養調査結果
- 10) ㈱東京書房社：世界栄養文化大全オランダ，48～49，69，31～35，1988
- 11) RECRUIT：就職ジャーナル，就職ジャーナル版 2002就職白書，45，2003年2月
- 12) 世界の女性国会議員 比率ランキング
<http://www.takase.gr.jp/sinnposiryou2.htm>
- 13) 文部科学省：総合的な学習の時間の新設
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/sougou/020501.htm
- 14) 文部科学省：食に関する指導の充実のための取組体制の整備について（第二次報告）
- 15) 厚生労働省健康局総務課生活習慣病対策室：平成14年 糖尿病実態調査（速報）平成15年8月
http://www.health-net.or.jp/data/menu05/toukei/tonyo_h14.pdf
- 16) 花木秀子他：栄養士を目指す女子短大生の食に関する現象（第3報）—調理知識および技能—
鹿児島純心女子短期大学研究紀要，第28号，129～139，1998
- 17) 花木秀子：栄養士という専門職に対する職業意識
鹿児島純心女子短期大学研究紀要，第25号，165～166，1994